

うたそら

第
16
号

2023
September

9

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「月」	16
短歌でまちがいさがし	21
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第16号

発行：2023.09.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

#うたそら

 次号予告

第 17 号

 短歌募集



第17号 23 10/31 (火) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「茶」1首

第18号 ^{（切）} '23 12/31(日) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「新」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

編集後記

朝晩はずいぶんと涼しくなってきましたが、日中はまだまだ暑い日が続きますね。夏休みも終わりで9月が始まりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

わたしは、この夏は暑すぎたせいもあってかあまり外出をしなかったので、秋こそはもう少しお出かけができたかなあと思っています。短歌イベントや歌会などに参加できるといいのですが……。皆さまにとってもすてきな秋となりますように。

次号は11月発行です。テーマ詠のお題は「茶」。たくさんのおすてきな作品を、お待ちしております！

編集鳥 千原こはる

✈ 今号のうたそら

第 16 号

参加唱歌人様……73名

☁ 連作欄 50 名

 テーマ詠欄 **63名**

一首評 6 名

コラム 池田竜男 さん

エッセイ 永井駿さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました！



illustration: kohagi chihara

あおいそうか	@aoisoka7
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
雨虎俊寛	@amefurashi3107
アライアヤ	@araiaya31
有村桔梗	@chattenoire_k
井倉りつ	@uta_1ltz
池田竜男	@tankadragonman
十六夜／朔	@izayoi_2022
石川順一	@Hitler57
魚野さぐみ	@__uomo
宇祖田都子	@Shimnsyutu2020
泳二	@Ejshimada
h.s	@hswelt

遠藤ミサキ	@qe_nol
大坪 命樹	@OotsuboMeiju
大橋 春人	@hachidx2
おおむつけんた	@subjperf
緒方 燕柳	@OGATA_Emyu
歌島 孟	@Sim1990
がね	@amicus08
涸れ井戸	@kareido1111
河岸景都	@kate_kawagishi
かわはう	@sukanikan_kawa
北谷雪	@kitaya_misomiso
砧	
君村類	@kmr_r09
虚光	@utsuronahikari
九月ゆうき	@suya_suyariz
くろだたけし	@tkuro2016
桜さくち	@wjs9f8NwfUjVq3
佐藤水魚	@satohie_tanka
サラダビートル	@kyokousalad
汐射ハルカ	@shioiri_haruka
雀來豆	@jacksbeans2
白石 夜花	@yohana_no_sekai

たえなかず	@suzusuzu2009
多香子	
田中翠香	@sukakinenbi
千原こはぎ	@kohagi_tw
月岡 浅葱	@pale_bg_moon
天国ななお	@momomiyam
ともえ夕夏	@croissant_hey_z
中村成志	@nakam8
夏生 薫	@kaorunatsuo
奈瑠太	@nalda_aa
西淳子	@jacky24Ray
薄荷。	@aie0himeco
はゆさく	@8yuki_3kura
疼木快維	@kaika031127
ひなお	
廣珍堂	@Htrochin_dos
笛地静恵	@Ymc6rhjEZgwq
福山桃歌	@momoka_fukuy
ふじはる	@Penguinjumping
細川エリカ	@Luvlukasen
真岡まな	@mao_or_mana
またけ	@mskpompomfuw

Marianne	@AmadeusViolon
御糸さち	@MEATsachi
深影コトハ	@cotoha_nikage
未知	@michi_31w
水也	@m_iya_o
深山睦美	@57577_77575
三好くに子	@qunnyco
虫武一俊	@mushtake
六浦筆の助	@Tohakumutun5057
村田一広	@mucc12022
森内詩紋	@Nj40cEv5g1cRpu
杜崎アオ	@morisaki_a0
杜野詩季	@4kitanka55
茂呂直人	@moronooto
月ノ華	@28moonflower
麿	@rou_tanka

計 73 名

たくさんのご参加
ありがとうございます！



16

リレーエッセイ

いちい

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

時間

書き手

永井駿

この一本の映画にかかった延べ時間数は一体どのくらいなのだろう、と考えたことがある。例えば総制作時間。例えば構想年数。具体的な時間を表す言葉はあるが、おそらくそれらは撮影に要した時間や、脚本家の頭の中のアイデアを起点にした時間であり、私の考える時間とは少しニュアンスが違う。仮に関与者が五〇〇人いて、一人一人のその映画に関わった時間を延べで計算すると、とんでもない時間になりそうであらう。

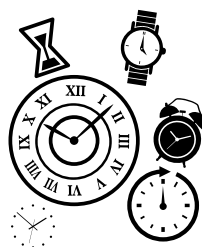
人間はさまざまなものを切り出して共有できる形にして、生活を発展させてきた生き物だと思ふ。火や、電気や、情報。人工知能の誕生によって、脳の中身の切り出しまで始まっている。ただ、時間を切り出して渡すことは少なくとも私が生きていた間には叶わなさそうであらう、叶わなくていい。切り出して渡せないからこそ、独立する互いの時間を持ち寄って同じ時間を共にすることに、かけがえのなさがある。

エンドロールは逆流する川のように、目を凝らして見ないとあっという間に過ぎ去る。目を凝らしていても、すべての名前を読み切ることには難しい。それなのに、昔の恋人と同名同名の美術担当を見つかったり、知人の名前（このときは本当にびっくりして巻き戻して再確認をした）を見つかったりすることができて、人間の脳はおもしろい。また、エンドロールを見れば見るほど、一つの映画に関わっている人の多さに私は毎度圧倒されるのである。

ある静かで素晴らしい映画を見終わっていつものようにエンドロールを眺めながら、ふと

どうせ海 離れるまでは聞いているあなたの川の……までのこと

永井駿



パーマネント・バケーション

雨虎俊寛

ナイトプールのフロートに横たわるビキニブリッジ渡る（てくてく指が）きみの背はストラトキヤスター軽率に掻き鳴らさずに盗み見ている僕たちはハーバリウムの中にいて飛び込み禁止のホイッスル遠く糖質の真夏の粒子を吸い込んだきみのタオルを渡してくれた今まさにきみが「あーん」とくれるのがポッキー史上もっともエモい塩分と亜鉛やフッ素、オレンジーナできみの吐息は構成されてキスマークここに付けてとねだられて痛いと思つてと声に出してと思つてこんな夜はズボンにチョコをつけたまま月の明かりで踊りませんか

スイーツアソート

有村桔梗

前向きな性格だらう みなおなじはうを向きたる鳩サブレはポロシヨコラひとときれ食べる さみしさがもうひとときれを食べさせてあるさみしさをわたしのなかにひからせて水蜜桃のパフェをくづしぬ富山から帰って鹿の子餅食めば半分くらいまだ夢にある薄闇にベビーカーカステラのふんはりとあまき匂ひに手を引かれたりフルーチェをひとりでぜんぶ食べるとふ野望叶へて夜がふかくなるわたくしに吸ひこまれゆくいちじくのタルトはすこしゆふぐれの味いそいとケーキ屋へゆく わたくしを和栗のモンブランが呼んでゐるのだ

連作欄 8首の連作

#うたそう 自由詠

「俺は楽しかったよ」なんて過去形にされて轟音響く空港
屋上のすべての赤い光たち「ぶつからないで」「ぶつからないで」
遠くなる飛行機 きつとはじめからわたしのチケットなんてなかった
捨てられたことを認めたくなくて人間でいることからやめたい
眠りたくない日曜の25時 金魚が口を開けて待ってる
おいでって言われて中に入りたい。ひれをひらひらさせて誘って。
液体の中に沈めば液体が目からこぼれることってないのね
傷口が空気に触れないようにって撫でてくれるやさしい金魚

食べたもの歩いたこと

氷入りアイスコーヒー飲んで居るみそまんじゅうを二個食べし後
中指の爪が人差し指を刺すぐるぐるぐるぐるの街中歩き
蚊を食べるトンボやツバメが好きだから田圃のあぜ道気を付けて歩く
ケリと言う鳥をシギだと勘違い鳴き出すまでは気付かなかったよ
田のケリを二度まで見ました二度目では六羽も居たが人が来ると逃げ
走ったり歩くと疲れる汗が出る疲労困憊パイのパイパイ
稲荷寿司パン入りカボチャスープ飲みブドウのジュエリーをデザートで食べ
スノーピーTシャツ犬はサーフィンす詳細な記録に憔悴して居る

ピフォア・フォーゲッティング

ホームラン日影のベンチ梨畑中庭の池朝の食卓
重力圏登って下りるだけの靴入口だけは無数にあった
音速の壁を破って飛んでいく選考基準を満たさぬ日傘
ブランコを埋めてしまった微動だにしない言葉を道連れにして
タイムオブデス一人ずつ目が回るスピードだけを抜き取る施術
生きてます 蜘蛛の糸かと思ったら竜巻でした でも生きてます
その後は枕の中で暮らしますすべての道が帰路のカーナビ
太陽とクマの形の氷かき来世も同じ名前で生きる

三百万立方メートル雨が降りどうしても届かない胸膈
汗なんて拭かずにサンダルで歩くあなたの街のある方角へ
台風に洗われた屋を見下ろしてベランダで飲みほす缶ビール
シロップをかけすぎた氷のようなゾンビのようなきみのTシャツ
恋人よファールボールは夏イチの入道雲に吸い込まれたり
夏だけは裏切らないな夕立もトマトも蟬も秋になるのも
イヤフォンをあふれた音は足元に淀みを作る 暑かった夜
ひとつずつ書き止めた今からきみがすべての夏を忘れる前に

実際何のことか分からないだろう。たくさん枝を
用意しても白猫は白梅にはならないし、感情は売り
物で「しかも」キャンベルのスープ缶には豆が詰
まっているものだ。文学とは狂っていいということ
だと平岡はよく分かっていて、狂う＝分かる＝読む
ということだと信じているにちがいない。狂うとし
たら私は幻覚よりも幻聴の方が怖い。幻聴は内部か
らも来るから。そもそも変える必要がないものを変
えるのに必要なものを声が語ってくる。たくさん
枝を読むものに手渡して。感情が売り物だという言
明を受け入れるつもりはないのに「なのに」と書か
れることでさらっと受け入れざるを得ずキャンベル
のスープ缶に豆が詰まっていることを飲み込まされ
る。分からないことでは分からないような、狂う
ことでしか分からないようなやり方で。

平岡の歌を読んだ印象は我妻の歌を読んだ印象と
だいぶ違う。すごく言いたいことを言われた気にな
る。でもその言いたいことは歌の外からはやってき
てはいないようにも思える。タイトルが「鏡の国の
梅子」であるにもかかわらず、あきらかに言明と思
われるような言葉は多いのに、それは背景を欠いた
そこでしか聞こえない声のようだ。だから清潔な印
象を持つ。おそらくは、信者が教祖の断片的な声を
清潔と感じるように。平岡の歌は浅瀬というより飲
まずにはいらぬグラスの水なのかもしれない。同
じ連作には「雨ざらしの家具にみえても構わないか
ら身長を書き込まないで」という分かりやすい歌も
あるがやはりこういう歌には力がない。声が外から
聞こえて沖に流されていくようだ。浮き輪も取られ

て。未知のものが何かを握らせてくる感じが
私がこの連作で一番好きな歌はこの歌。

肉眼でみるには姉は小さくて姉の代わりにここ
にきました 平岡直子

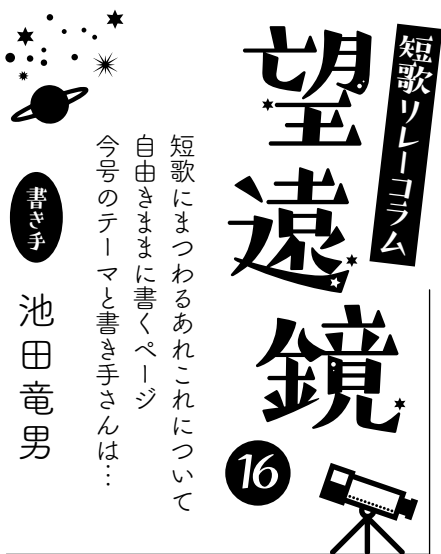
肉眼でみると小さい姉というのがまずおもしろく
て、たしかに肉眼でみるには小さすぎる姉だといろ
いろ困ることも多いのだろう、ということが姉の代
わりにここにきましたという丁寧な物言いによって
納得させられる。下の句まで読むと上の句の声のボ
リュームが上がるのも平岡の歌の特徴かもしれない。
別の変わったあたり方で浅瀬にいる歌集もある。永
井亘の『空間における殺人の再現』だ。この歌集は
かなり分かりにくい。

動物は煙になってしまふけど夕日は本物を持つ
てきて 永井亘
口元は途切れた夕焼けを真似て正しい発音で
罵った 同

夕日や夕焼けは歌集中たぶん最も多く使われてい
る言葉で、永井にとって特別な意味をもっている(次
に多いのが「啄木鳥」という言葉。「啄木鳥をこら
えたら」というすごい結句の歌もある)。食べるた
めか申うためか焼かれて煙になってしまふ動物は贗
物でそうした体を持たない夕日の本物を持つてきて
という。途切れた夕焼けを口が真似るならその口か

らは罵声が出るだろう。夕焼けは永井にとって外か
ら到来するもので不完全な現実浸潤するものとし
て描かれる。永井の歌の多くからは言葉の界面が崩
れてゆく感じがして、補う、崩れる、瓦解するとい
う意味の語も歌集で多く使われている。夕焼けの反
対語はたぶんケチャップで、我妻俊樹がケチャップ
の歌人だとすると永井亘は夕焼けの歌人ということ
もできる。

一方で永井は我妻や平岡ならこういう使い方はし
ないだろうというやり方で、心、感情、魂、という
語を使う。我妻や平岡にとつて心や魂は歌の中では
他者としてしか存在してはならないもののはずだ
が、永井が心と書くときにはその心は普段私たちが
使う心と変わりないように思える。にもかかわらず
永井の歌は浅瀬にある。なぜそうなのか答えるのが
難しい。主体はいるけれど移動変容崩壊する過程の
主体だからと曖昧にいうことはできるけど本当にそ
うだろうか。永井にも「飛ぶ鳥の自由な影を憐れん
で君は広場の明るさを言う」といった分かりやすい
(でもすばらしい)歌もある。だが多くの歌は言葉
とその言葉に関わるものとしての主体の輪郭が薄れ
ていくように読める。永井にとって沖は深いところ
ではなく浅瀬に波を送るためだけにある外部として
必要とされていて、その短歌は波という形の沖に洗
われながらやはり浅瀬にいる。
書いてみて浅瀬は永井亘の歌集だけになったけど
テーマはそのままにします。



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手

池田竜男

テーマ

浅瀬の短歌

小さい子と話していると何を話しているか分からないことがたくさん出てきてそれについて聞いたり聞かなかったりして話をたどっていくのが楽しい。話が浜から沖の方へ進んでいると誤解しないのが楽しく話をすることはこちらが沖の深さをほめめかさなにかぎり話す方も聞く方も広い遠浅でずっと歩いたり泳いだりして遊んでいられる。自分も話をしていて何を話しているか分からなくなることがよくあるけど、好きなのが何話してたつくと聞いたときに自分が思いもよらないことを言われるとき。多幸という感じがする。

浅瀬の短歌というのはたくさんあつてよほど沖で溺れるふりをするのが好きな歌人以外ならどんな歌

集にも必ず浅瀬の歌はあるけど歌人全体の印象や歌集全部が浅瀬であるようなものはあまり多くないと思う。まずは我妻俊樹の『カメラは光ることをやめて触った』からまあまあ好きな歌を。浅瀬というより子供用プールのような歌集。

道々にざくろ咲くならふところにあかるくバドワイザーの空き瓶

我妻俊樹

おもしろい歌だけどこの歌を愛誦する人はいない気がする（私はしない）。愛誦というのは歌と一緒に沖に出てその深さを感じつつ泳ぐようなことで、この歌にそういう深さはまったく感じられない。仮定される道々のざくろもそこに咲く固有の歴史を背負っていないし、ふところに何かが隠れている気配もしないままに味もデザインも薄っぺらさそのものであるバドワイザーの空き瓶があかるく入っている（だいたい道々って何だろう）。

この歌にも主体はいる。でもその主体がその主体である必要はない。バドワイザーの空き瓶がそのバドワイザーの空き瓶である必要がないように。この主体はこの歌を読むときにかりうじて存在するだけで他のいかなる時間にも空間にも存在しない主体である。主体の位置を同定しようとすると思えなくなるような。

我妻の歌はそういう歌が多くて、短歌一首において書かれている言葉以外のものが存在することを短歌そのものが厭っている。その厭悪を読んだ人が忘れないといけないような強さで。書かれている言葉

と言葉のつながり以外の見えない文脈はないということを一一首が読む人にはつきり伝えてくる。この歌には外部はないと。また口語口調を使っているも我妻の歌からは声があり聞こえない。声も外部もないのに我妻の歌がおもしろく読めるというのはどういことか私もちゃんと分かっているけどたぶん短歌定型のなせるわざだろう。短歌定型は地球全部が入る箱舟のようなものだ。とはいえ我妻の歌にも声を感じるような歌はあって次のような歌を読むと平岡直子の歌と思えなくもない。

爆発があつたつてみんな云うけれど塗りつぶされた看板ばかりだ

我妻俊樹

平岡直子の歌には声がある。私がもっとも好きな連作の一つに平岡の「鏡の国の梅子」（『外出』一頁）がある。津田梅子を思わせるタイトルで実際お札の歌も出てくる。タイトルがすでに声を出そうとしているといつていい。津田梅子について語るとは多そうだ。でも平岡の短歌は潔癖なまでに外部からの侵入を嫌がっている印象がある。でも多くの歌が声を上げる。かなりの大声で。平岡の歌にある中毒性は声の大きさと清潔さにあるんじゃないかと思う。

白猫を白梅の樹に変えるにはすごくたくさん枝が要るのよ

平岡直子

感情が売り物なのにキャンベルのスूप缶には豆が詰まつて

同

悪る日も見ずを流す

大坪命樹

汚染水世界が海に垂れ流すは人口過多が対策なるやは放射能海にうすめ人にうす目 しかして危険ぞ見ざらんとするか 薄めても遺伝子を切る破壊力かはらざるまま広がりゆきぬ 負の遺産残さざらんとしたまふに放射能なむ世界に散ずる 世界向け毒水流すはミサイル無きわが国が新核兵器なるか 中国の魚の禁輸に異となふる政治にぞなほ倫理あらざる 岸田氏のバイオハザード流しをる 人類愛が心中なるやは 処理水の海へ放てる安全性 悪ぞ科学にて正当化しぬる

夏の落としもの

大橋春人

コロナ歌に終わりは見えず四年目のマスクも口をぐわぐわにする 落としものだらけの夏を 二十年前は嵐に立ちションをした 忘れものだらけの夏を 十年前あえてカセットテープのサザン 青春を遠く離れてサンダルの私は夏の終わりの屋台 終バスに揺られることのない日々を缶コーヒーも高すぎるんや 今、ここに浮き沈みする感情をうまく掬えるポイをください もう若さだけでは勝てぬ年となり頭のネジに油を挿しぬ 限りなく静かな午後の八月の果てをふんわり浮くうろこ雲

桃のしずく

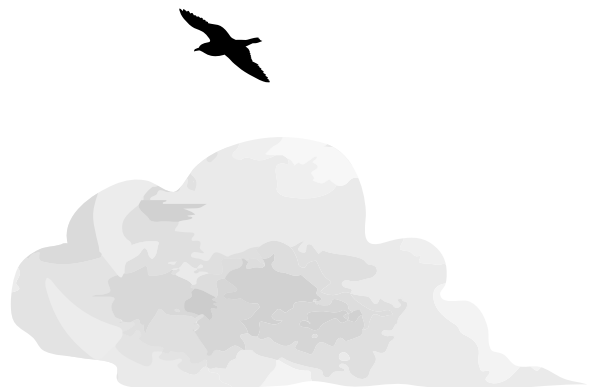
緒方 燕柳

桃を剥く母の手の手の皺つゆに濡れ子を慈しむその愛おしさ 満月の夜には桃が食べたくて販売ページと睨めっこする 月光と桃の雫はどこかしら似ている 甘やかなあたりとか 満月に桃を見立ててそつと剥くそして丸ごと歯を立てて食む 満月に願いが叶うというならば桃の甘みを人生にする 甘やかなだけではなくて美しい桃の実の色産毛のひかり 福島の小ぶりの桃の美味しさよ温泉上がりの小腹を満たす ずつしりと桃の重みの岡山産一度食べたなら忘れられない

社畜さんになるワタシ

歌島孟

たんだんと日々が続いていく 今日も残業だけど、いつものことだ シュレッターに首を切られた文字たちのやさしく踊れ、意味を忘れて 残された自席がひとつ照らされて、舞台へ戻る役者のように デスマーチしているからね、幽霊が来たって何も怖くはないよ 猫も又、恋をするものなのか この月へと昇る声の鋭さ ハッピーエンド。ってことにしませんか、したなら、今日は報われますか？ 立ち去っていいのだろうか。今はまだ夕陽が見えて、空がきれいだ 君を褒めて褒め倒すから、褒め疲れ倒れていたら撫でて、頭を



前号のまちがいさがし 答えあわせ

一首評

西淳子

夢色のでっかい馬糞撒き散らし竹下通り
を往くユニコーン

深山睦美

でっかい馬糞で笑っちゃいました！私のなかで幻
獣ってうんちしないイメージがあったんですが。ユ
ニコーンって馬だもんね。ユニコーンのうんちはた
しかに馬糞だよな。あと、でかそうなのも分かる。
何かハッとさせられました。「夢色」「竹下通り」「ユ
ニコーン」といゆる「カワイイ」とか「ゆめかわ
いい」が出てきて、きやりーばみゅばみゅっぽい世
界観の一首だなと思いました。可愛いのなかにグロ
キモが混ざった感じが。

湯冷め

がね

終わるまでじっとしている湯冷めしたからだに残る火を抱き留めて
二日目のスープは味が煮詰まってじゃがいもの曖昧な輪郭
月曜日 オフィスのひかりは騒がしい 首の力が抜けないでいる
銃口はあなたにも似て撃ち出した言葉の影で冷えてく虚ろ
望遠鏡があれば遠くの星を見る 遠くからなら綺麗に見える
ピクミンが死んだら時間を巻き戻すくらいワガママ言えば良かった
胸板に乳首があつて救急車のわたし以外を救うサイレン
しりとりをしようよ よるは はかなくて てんじょうのした ただれるじかん

名古屋・金山

濁れ井戸

いつもとは反対向きの便に乗る米原を経て名古屋に向かう
JR線で金山ばたばたと行き交う群れと同化する昼
アスナルで時間調整コロシム様の商業施設の愉楽
会場はレンタルルーム大名古屋句会に参加まる四年ぶり
窓からの日差しが一時暗くなりロック鳥みたいなやつがいる
全五枚清用紙に過去未来森羅万象詠み込まれた句
歳時記のこだわりは皆それぞれでそんな話だけで楽しい
来週はフランスに発つ青年とまた会おうねと約束をする

コラーージュ

河岸景都

お気に入りばかり集めた罪として命が下手になる罰がある
少しだけ素敵な家に棲めるよう芸術的な呼吸を見せて
悲しみの一部を切った新聞で包むバスボム、誕生日だよ
どこまでが私で何が私なの答えはとうに茶毘に付された
純粋なものはどこにも無くなったヒトにもきつとネコの眼がある
糊付けを忘れた切手、意味ならばここにあるのに届けられない
君だけに見えた景色を切り取れば幸福だけは分かるだろうか
旅立ちの始まる場所に飾りたいコラーージュだけを増やしていこう

お弁当

かわはう

わたし用の梅干しといもうと用のカリカリ梅と母からの愛
実家の卵焼きはしょっぱい味でいつもいちばん最後に食べた
昨日の夕飯がおでんだったから今日のお昼はおでん弁当
運動会タッパーに敷き詰められたペンネとおにぎりをプラフオークで
いつからか変なふりかけが入ってて数少ない母のユーモアだった
母の作るおにぎりはいつも混ぜご飯で春の花畑のようだった
ランチバッグに季節の果物を入れる母さくらんぼで夏の訪れ知る
シウマイ弁当も叙々苑弁当も勝てぬ母の手づくり弁当

101個のまちがいは
見つかりましたか？

前号のまちがいさがしの答えはこちら！

ほっとひととき

短歌で

まちがいさがし 答えあわせ

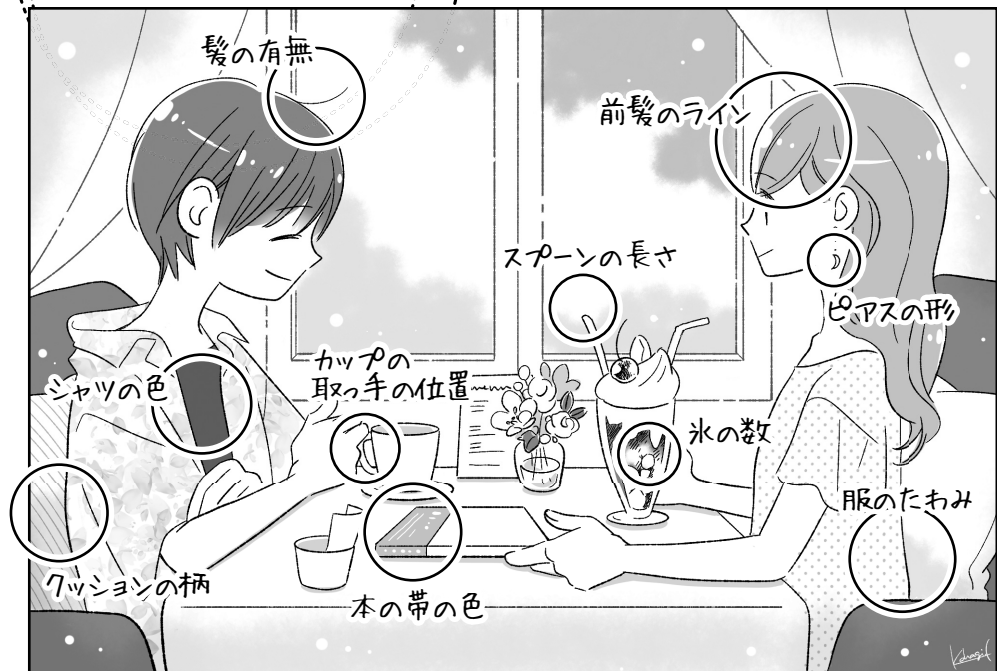


Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

人ひとり殺めてしまふ勢いでハーゲン
ダッツにフォークを立てる

新井きわ

食の通過儀礼のよう。主体がカチカチに凍った厄介な生物と格闘し、喜びで入り混じる景が浮かびます。31音に、「アイス」3音でなく「ハーゲンダッツ」6音としたところにも、「ハーゲンダッツ」を食すは特別な時間とリスペクトされているのかなど。なかなか溶けない、なかなか味わえない、生きとし生けるものにフォークを立てる挑みがたまらなく可愛いです。ちなみにハーゲンダッツ専用スプーンだと少しは早く溶けるみたいです。

一首評

はゆさく

雨の日のその静けさの鳥たちよ羽根に水
玉いくつも載せて

大橋 春人

『世界のすべての鳥たちへ』、連作を通して、鳥、雨、静けさ、そして祈りが巧みに詠みこまれていて心を揺さぶる。感傷的な歌は嫌いだという口癖が出せないでいる。それがこの歌の力かな。ともあれ私は鳥の歌が好きなのである。だから引用歌の上句は刺さる。この十七音だけで完成された詩だと唸らされて一息をつく。一息ついてビールを飲む。いい短歌は最高の酒肴だ。O birds / Of a rainy day / Of that stillness 酔ったので英訳までしまったよ。

一首評

雀来豆

美術室は完璧だった あまり1、みたい
な椅子と先生がいて

北谷雪

連作「森のひとびと」からの一首。美大生とその周辺から美術室という場所にフォークスされた歌で、そこはいなくてもいい？先生がぼつねんといて初めて完成となる空間のようです。椅子と先生を「あまり1」とする発想の新鮮さ。また「完璧」と「あまり1」という言葉の対比も効いています。美術に関わっていると思われる作者だからこそその視点だと思っています。懐かしい絵を見たような一首でした。

一首評

杜野詩季

できるだけ人肌のまま触れたくて声に加
えて首もうなずく

君村類

たぶん電話発明の時から、人は声だけでなく身振り手振り付で受話器に向かっていた。それは礼儀作法や情報をより届かせるための技術ではなく、それこそ人が言葉を交わし始めた頃からの習慣が、本能となっているのだ。主人公も、相手を感じたいからこそ自然に体が動いている。後からそれに気づく。それが「触れたくて」の表現となる。

ひらがなや「人」「肌」「触」の円やかな流れの中で、「声」「加」「首」の力音の尖りが美しい。

一首評

中村成志

さつき挨拶した先生とすれ違うときの会
釈のように降る雨

ツマモヨコ

とても好きな短歌だ。構造としては岡井隆のいう「序詞的比喩」になっている。前半の細かい描写が「ように」によって直喩であったことを明かされるところに、構造的カタルシスがある。この絶妙な比喩からは誰もが、少し伏し目がちに、しとしととやわらかく降る雨を思い浮かべるだろう。収められている連作のタイトルが「日輪」であることを踏まえると太陽の照る晴天から気恥ずかしそうに降っている天気雨のことだと読み取れる。

一首評

疼木快維

夢のなかの中華飯店

北谷雪

個性

くらだたけし

喧騒と幻惑 夜店は笑わない人とだれかに似た人ばかり
兎角えび餃子を食べたいメニューには虹虹蝦夢だとわかる
宝石商のように蒸籠は開かれて澄面皮から翡翠の光
福の字は逆さま今宵こうふくの完成形を忘れてしまふ
箸立てから選んだ箸に易占の男がわずかに顔を顰めた
戻れないことはおそろし湯はひどく正しい手順で茶器を渡った
パクチーを口から生やし熱心に森の嘆きを語る隣席
瞬く間笑顔と真顔を張り替えるひとの真顔に手を振ったのだ

悔悟

君村類

どろどろのアイスを食べる 恋も愛も勲章だったティーンエイジャー
水差しへ夏がうつってわたしまで常温よりもだいぶ生ぬるい
世界中が暑いと思う夜の端の眠る間際の果てない暗さ
夢だって気づいてしまふ流星群みたいに話がずっと続いて
泣きながら目覚めた朝がある人もそうでない人も足元に影
片方の翼が取れた比喩としてわたしがずっとそうだったこと
この夏は氷菓ばかりを買っている壊れるものははじめからきれい
ほんとうにひとりぼっちになった部屋に窓は真東 夜がまた来る

横浜 2DAYS

桜さくう

恒例のロックバンドの夏イベに初めて誘う友とその友
横浜のランチの風習 予約ある飯店へ中華街を歩く
アリーナにスマチケかざす夕まぐれ光る 「Thank you sold out」
まばたきを忘れるような良席にメンバーの汗までまぶしくて
高校でコピーバンドをなした友ほろ酔いの夜にファンに戻る
にぎやかなグッズ売り場に迷いこむひとり参加のライブ二日目
陽炎のひと日を印す銀テープ分けあう人よまた会いましょう
真夏より熱いライブの人波に新幹線のダイヤ乱れて

花火

佐藤水魚

缶ビール オレンジジュース あのと時の子どもと少し未来の大人と
子どもらが駆け寄ってきて次々と花火のように会話がひらく
教わったわけじゃないけど輪になって手からこぼれる星を見せ合う
さくさくとりんご飴からほの甘い香りはじけて尺玉の咲く
爆ぜる爆ぜる光の中でまだ肩に届かぬ背丈の影描かれる
ああきみはいつ気づくかな刈草の匂いが海馬にしまっていること
沈黙に秋は訪う残響と金の柳の溶けた夜空に
僕たちのためと思えるスターマインだから拍手をもって送ろう

知らん話すんな

サラダビートル

ペルソナでキノツラユキを呼び出して火炎攻撃する意外性
人修羅が地母の晩餐撃つときの真似がきつてもう歳かなあ
もし僕がペルソナ使いだったならヒルコでメギドラオンを撃ちたい
おれはメガテンエापでうたを書く外道『オタク』今後ともよろしく
はい特技はハマオンです競合他社を確率で即死させます
海外の宗教者に超怒られてでも作ってくれてありがとう
「切なさ乱れうち」は皆やってるが「刹那五月雨撃ち」はできない
ベルベットルームに行ったことがある小宮さんは休憩中だった

快速汐風

汐射ハルカ

降ってくる空は砂地に侵み込んで決別の日を醸成させる
前髪はいつも言うこと聞かなくてわたしは愛を測りきれない
向こうには寝息をたてるひとがいる嘆きかなしみ戸惑い嘆き
ふわわり漂ようわたし類型に嵌めたい他人に毒を盛ります
天井の無数のしみは白い雲取り残された旅鳥一羽
この部屋は強制されたいえだから壊しておくねいつてらっしゃい
この空の広さ深さを知るひとよかなしみの淵背負うひとこそ
水底に波紋のしるし水泡のきらめくひかり手脚ひろげて

世界一

雀來豆

世界一美しい文字図鑑その文字はほんとうにいいのではないのです
鹿が来てまた鹿が来て占拠する東大寺二月堂の登廊
待とう蚊にくわれた痕がわたくしという現象が消えてゆくのを
越して来て初めて知ったこの街にプラネタリウムも海も無いこと
ライカMモノクロームが写しだす虹はあたかも空の葬列
東大寺唐招提寺薬師寺とさすらいながら老いてゆく鹿
八月の風吹きぬけて鷺池に幻のごと百日紅ふる
夜明けまえ空のまほらをゆく鳥に眠らぬわけを問いかけてみる

まだ月へも行つてないのにはやばやと火星へのツアーを申し込む

村田一広

テーマ詠から拝借した
短歌をもとにして描いた
イラストのなかに
10個のまちがひがあります
見つけられるかな？

ほっとひといき 短歌で
まちがいさがし



Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

テーマ詠 「月」

あのひとが海原ならば月になる満ちることなく欠けることなく
 月のない夜でも月は空にある硝子の窓をまあるく切って
 生きている人はいますかラジオより月の光が漏れ出づる夜
 十五夜を風雨に巻かれ下向けば汁粉の上に白玉の月
 まだ月へも行つてないのにはやばやと火星へのツアーを申し込む
 早涼を照らす満月ぼんやりと漂う宇宙のクラゲのふりで
 月だったこともわすれて硝子器にヴィシソワーズのしずかな湖面
 蜜月のグアムの海のきらめきが海鼠なまこの群れに負けていたこと
 三日月を「爪みたい」って言う君が夜空に見てる指はなに指？
 隣立つ君に素直に言えなくて「月が綺麗ね」とそっと呟く
 太陽に手を伸ばすたび思ひ出すからだに月を飼つてゐること

- ◆ 未知
- ◆ 水也
- ◆ 深山睦美
- ◆ 六浦筆の助
- ◆ 村田一広
- ◆ 森内詩紋
- ◆ 杜崎アオ
- ◆ 杜野詩季
- ◆ 茂呂直人
- ◆ 月ノ華
- ◆ 朧



失望はじめました

たえなかず

駅ナカの蕎麦屋でひみつの待ち合わせやや緊張ぎみに微笑んでいる
 たわむれに腕を伸ばしてたわむれに待つていたのだろうか あなたは
 空けていない缶の雫をぬぐう指 圧倒的に目は合ったまま
 これもまた傷みはじめた恋かしら桃を剥くのはいつもひとり
 黄昏はまなざしに射しそのちにきみの隣に落ちてゆくかも
 熱帯は遠いでしょうか 純愛をしておりますが行けるでしょうか
 キャンドルに照らされるひと照らすひと 泣き顔からまず演じてほしい
 しばらくは歩いて笑つて歌つたらそれぞれさみしい家へ帰ろう

秋のソナタ

多香子

夏終り湯上りの肌にはんのりとミルク色した乳液をつける
 身体って伸びるしなかなか縮まない、季節が変わると服が縮むし
 秋の日のくしゃみは誰かと思えど猫もすすきにむせる
 のそのそと支度手間取るわたくしに「はがゆいのよ」と高橋真梨子が
 赤トンボ一つ一つが柵の上この家の人はもう居りません
 台風の直撃受けるふる里はライブカメラの画面に真っ白
 秋風に乱れる髪を気にしておしゃれインコの毛づくろいのよう
 手の内にハトや子猫が出るような素敵ミラクル起これ月曜

心頭滅却

田中翠香

凄まじき暑さが続く令和かなアイスを買えばたちまち溶ける
 冷房は軟弱者の証ゆえけしてつけないたぶんつけない
 あくまでも心頭滅却すればよいたちまち涼しくなることでしょう
 恵林寺の快川和尚は火の中で心頭滅却していたらしい
 その結果和尚は焼けて死んだのか仕方ないからクーラー入れよ
 クーラーを入れてもむろん心頭は滅却できるアイス食べつつ
 暑すぎて蝉も鳴かない日曜日腰くらいまで液化してない？
 ああ地球温暖化ですぬこの暑さ眠さもきつと環境のせい

もう

千原こはぎ

もうくれる気持ち薄くなったことわただけ気がついてしまつて
 声を聞くだけで喜んでくれた日もあった おんなじ大きだった
 会うことも話すことも努力になつていらなら手放していいのに
 きみじゃないひととご飯を食べに行く自傷みたいな想像をする
 大丈夫、依存しないし大人だしもともとわたしのじゃなかったし
 数年をありがとう妙に身は軽く軽薄にこぼれる百日紅
 寝不足の目蓋にしみる改札を出ればすべてが終わりゆく夏
 もうなんて言われてもいいこれ以上傷つくことのない毎日に

母もまた喪っている朝夕を静かに祈るかなしみの背
手伝えることを探した龍神の祠の水をとりかえにゆく
生きるのは必死のことと祖母も母もつながる道のうえにそれぞれ
小糠雨そぼふる村にコンビニはなくてお菓子に商店で買う
遠足を不安げに待つ子らのいて祖母に甘えていたのだ私
学校をまた三日休むあの子らの遠足は晴れていなければならぬ
まだこわい 形見となった大幣を手にあめつちとつながる覚悟
祭壇に向かって二礼 雨音が私を試しにきて本降りだ

としてのビール

中村成志

ガリバーが抜けたのでしょか隧道の奥の奥処に陽光の針
八月のスノードームに込められた水ひと握り熱を湛えて
とおりやんせ紅い鳥居の連なりに染まり始める足袋先の爪
朝焼けは覗き見るもの夕焼けは否応なしに肩へ降る物
桜葉が散り始めてもおつとめがまだ終わらんのかいなど蟬が
麻痺剤としてのビール興奮剤としてのビールひとりのビール
夜明け方の風いつの間に肌を包みふかい眠りにはならないだろう
熾火へと手を近づけるそもそのほとりへ帰りがたがるのが人

怪奇星キューのすべてのちよつと

西淳子

宇宙船の墜落だつて知ってたら願いを三回唱えなかった
Spotifyで配信されているかもと「やさしい地球」で検索する
真っ黒な人形。そして、まっくらなひとがた。涙が出そうになった
衣食住だけじゃないぼくたちにあとひとつだけアレをください
雷光ののちに雷鳴。腹話術みたいだねって、きみは笑って
ちよつと、ちよつと、ちよつとがあつまつて星になったの、あそびにおいて
詩が彗星みたいに届き、こわいつて生きることだと教えてくれる
すぐろくで最初にあがる それからは彼らの守護霊みたいな時間

灯火や時間遅れの吹き流し花の匂いまで月に向かう

◆ はゆさく

月面にアロナルフアを塗りたくる計画だけを頼りに暮らす

◆ 疼木快維

散歩に出れば西空には月 犬に話しかけると寄り添ってくる

◆ ひなお

今日の月笑っていたと絵日記にクレヨンで描く星形のまる

◆ 廣珍堂

この町の金持ちだよなあちこちに駐車場もつ月極さんは

◆ 笛地静恵

燦然ときみは輝く 月のないわたしの夜空を焦がすシリウス

◆ 福山桃歌

恋ひしさを切りとつたやうな三日月も各駅ごとに一緒にとまる

◆ ふじはる

三日月の針であなたを釣り上げて星夜の魚籠に込め眺めたい

◆ 細川エリカ

月だけが知ってる私の朝帰り 好きなの？彼が 好きだよ彼が

◆ 真岡まな

秘め事は秘めているから美しく月の極地に投げている石

◆ まさけ

ぬばたまの夜に欠けたる望月も居待ち臥し待ち君ましかねや

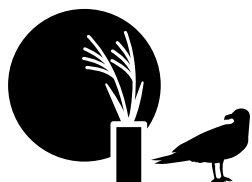
◆ Marianne

いつまでも回収されない伏線のように月には裏側がある

◆ 御糸さち

信仰を持たぬ身体で月光を浴びれば骨の軋みゆく音

◆ 深影コトハ



テーマ詠「月」

うしろからやさしいひかりが満ちてきて黄色いボタンの月が見ていた
◆ 汐射ハルカ

たき火つて十年ぶりだ弟のコグマ月の輪から燃えてゆく
◆ 雀來豆

殺すなら月が綺麗な夜にして 最期くらいは輝きたいの
◆ 白石 夜花

三日月のどちらを握ればよいのだろう白い刃先はしつとり濡れて
◆ たえなかず

カロリーは気にせず食べる月餅に桃の花びら丸く描かれて
◆ 田中翠香

「じゃあね」って言い合ったあと動けない今夜の月が強すぎるせい
◆ 千原こはぎ

満月の夜に買いたい 同様に確からしい白桃をひとつ
◆ 月岡 浅葱

月はかたちだけでなくていろだつてかわっているでも空にあるの
◆ 天国ななお

白鯨が八月を翔ぶ昨日までの運動靴はちひさくなりぬ
◆ ともえ夕夏

新宿から大月までを各駅で言える人ほら湖面に道が
◆ 中村成志

ご相伴にあずかりたくて掲げ持つ白いお猪口に迎えたる月
◆ 夏生 薫

8月はメビウスの輪で神様がハサミを入れて9月に変える
◆ 西淳子

空じゅうが淡い香りに包まれる苹果ソルべのような月の出
◆ 薄荷。

青い天井

薄荷。

Elsagate

疼木快維

水底はうす青色にゆらめいて屋内プールのゆたかな光
スタートは小指の先までまっすぐに水面を切りさくナイフとなって
肉体の重さ忘れる背泳のスタートを切るその瞬間に
見上げれば視界は優しくきらめいて水の向こうの青い天井
指先を水にすべらせ始まりのワンストロークの確かな手ごたえ
まっすぐに白い飛沫を蹴りあげて泳ぐつま先、トビウオダンス
五メートルフラッグの黄は鮮やかで進むぼくらを待ち構えている
歓声は魚になって青空の端から端までぐんぐん泳ぐ

おかしな二人

はゆさく

週末をどこで過ごすか決めたけどあのスイーツもレビュー気になる
マンデリンフレンチモカの爽やかなあなたに似てる香り見つけた
上空に青の洞窟が浮かんでクラッシュしていく二人のボート
手を振った雲はあの子のわたしを甘く溶かしてわたあめつくる
いろいろと思うココロを二人分の型に入れて焼くモニュメント
お砂糖が敷き詰められた時間には黙っていても重なる視界
食べるから甘いを買う?とカゴ入れた 二人で食べるフラン・パティシエ
世界中あなたとわたし二人きり おかしな二人END、胸熱

夕焼け

ひなお

公園の女神像は甕から水を注ぎ 噴水からは虹が生まれる
遊歩道にサンダルが一组落ちている 周りを見るが誰もいない
近づく船虫が素早く岩の間に逃げる覗くと何十何百もいる
ヒトデが浜辺に散らばっている子供たちは拾っては投げる
貝殻を拾って笑う君の笑顔 ああそのような時もありし
江ノ電の車窓 夕焼けが海を染め漁船が港に帰ってくるのが見える
電車を降りて海に近づく磯の香りと風の冷たさが肌に染みる
夕焼けに染まる空と海 来世とはこんな所かとひとり微笑む

青軽き南の島の漣に飛び込ままほし高齡の肌
電停の横の木陰に放課後のスイーツ店を決むる声あり
営業の汗の滲みし襟口をやうやく冷やす空調の口
エアコンの奥のパーツをひとつ持ち取り寄せ七日は遥かに遠し
ウインドーのラッシュガードとビキニとが猛暑の肌を吸ひ寄せてゐる
陽は高く重き装具の兵士らは汗と泥との銃弾を撃つ
駅前でスタバのカフェラテふたつ持ちトイレの先輩待つ仕事なり
藪の中秘密基地へと前進し猛暑日にひとつコーラ運びぬ

小学校五年生の学び舎

笛地静恵

思い出の国にのみある学び舎の夢の道から正門くぐり
金賞の紙をはられたばかりの絵よ廊下の風にふるえているか
骨格の標本の棲む理科室はときどき妙にしんとしている
雨音は全教室をとりかこみ眠りの粉をうすきまぶたへ
宿題を忘れたひとりたちんぼうバケツの水もたそがれている
ランドセル背負ったままの放課後ぞカラスの森へ虫捕りに飛ぶ
真っ黒な夕焼けへ立ちさようなら ふりかえらずに六年生へ
のりはがす教科書の紙べりべりと紙の匂いの新しきかな

したたかに生きながらえてほしかったひょうひょうとした背中のみで
永遠の少年としてちはやぶる村上春樹を小脇に抱え
口端を上げてへらへら笑つては気まぐれな言葉さえ好きだった
冷えた腕で抱きしめられて始まったのに薄暗いくちづけばかり
消しかすを払うみたいに拒まれて世界が割れてしまった日のこと
どしゃ降りの雨に降られたわたしには謝らなかつたきみの純情
「星とかにされたくなくて」「何になりたいの?」「何にもなりたくない」
いつかぜんぶきみのせいにする終わらない恋も何も見えない夜も

アラウンドファイフティー 999

まさけ

右足の膝が痛くて仰ぐ空 火星の親父よ君は正しい
メーテルが初恋だったと言う人の女がショートヘアの理由は
ラーメンは尊きものでチャーシューを食みつ浮かべる厚いビフテキ
万感の思いを込めて行く汽車の息子の顔に見てるあの頃
自分以外全部バカ学博士だろう怒声ばかりのうちの社長は
荒れ狂う客と天候持つ傘を戦士の銃のように構えて
果てにあるアンドロメダの輝きに酷似しているスナック銀河
社のネジになっております魂は売るか俺らはアラウンドファイフティー

ほんとだよ大人になるのは悪いことペットボトルじゃ月には行けない

◆ 遠藤ミサキ

雲間より見え隠れする名月よ恥じらふかたちぞ乙女のごとき

◆ 大坪命樹

熱中症をゆっくり言わせるごと安くなつた月、でも、綺麗なんだよ

◆ おおむうけんた

光散るゴツホの描く星月夜 私の詩を導いている

◆ 緒方 燕柳

華金に（笑）を付けて日を跨ぐ月が会社の窓から見える

◆ 歌島孟

八月の平和園には九冊目の短歌スケッチブック雄弁

◆ 洵れ井戸

濃い青が目蓋の裏で爆ぜている八月だけの魔法だったよ

◆ 河岸景都

知らぬ間に近づいているプログレスの月はもうすぐ満月になる

◆ 砧

新月のまばゆい暗さ してみた悪いことならたしかにあった

◆ 君村類

月旅行はきっちり傘を差してゆく 地球に先っぽ差し向けながら

◆ 虚光

あの月はべたんこの月それでいいきみは名前を知りたがるけど

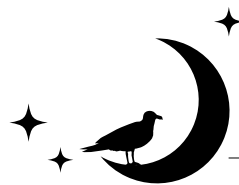
◆ 九月ゆうき

眠れない夜の数だけ光らせて缶より皿へすべる半月

◆ 佐藤氷魚

古事記にもツクヨミはあまり出ないのにメガテンに出るわけにいかない

◆ サラダビートル



「月」

テーマ詠

満月に羽があつても翔ぶことができない蝶を拾い集める

鈍くなり月の魔力を怖がらず眺められそう 強くなりたい

彼のことなんて話すな青白い天の穴まできみを攫さらおう

美しい月という名の舟に乗りあなたはあなたらしく進める

七月の王冠だらう きみの食むサクレのうへにかがやく檸檬

がんばって忘れていくから、だからもう、もう光るのをやめてください

満月のように硬貨が透き通るかけがえのないものはもう寝た

夕月夜あふれるほどの文だけがあなたとの時間永遠に微笑む

満月は夜ではないと醍醐味が分らないからそぞろ歩きます

月面にそよ風の吹く夢をみる 宇宙でひとり漂わず飛ぶ

まっすぐなものはなんにもない月で障子に穴を開けたがる指

何回も何回も分け合ってきた会うたび一つしかない月を

月並みな言葉で君をなぐさめて買って帰ったハーゲンダッツ

◆ あおいそうか

◆ 麻倉ゆえ

◆ 雨虎俊寛

◆ アライアヤ

◆ 有村桔梗

◆ 井倉りつ

◆ 池田竜男

◆ 十六夜／朔

◆ 石川順一

◆ 魚野さざみ

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ 上

夏の門！

御糸さち

桜前線

未知

ひまわりの畑のまわり駆けまわり色鉛筆がまた減ってゆく

長靴をそろえて置けば現れる座敷わらしの白すぎる肌

ドンダリをぶつけてブタを捕まえてハムという名をつけて育てる

そういえばこの町には床屋がないな メガネ屋はあっていま目が合った

お風呂なら二日に一度 その代わり毎日となり町の川面へ

えんとつも時計の塔も灯台も記念碑でしかない、この夏の

ゆやゆよん テントの中はまぼろしに満ちまやかしのまほろばの夜

たからものみたいに光る空きビンのように光っている日々だった

どしゃ降りの予報は外れ人生の桜前線がせまっています

信じれるものは信じるおうし座の恋愛運は花丸でしょう

冷静に分析してる運命の人と出逢ってしまう確率

笑ったら八重歯が見えて本日は一目惚れにてお休みします

気をぬけば開いてしまう心から君が飛び出さないようにって

気がつけば共通点を探してラッキーカラーはオレンジらしい

つまらない会議も君の口癖を探す研究時間になる

笑ったら桜みたいとほころんだ見つめるわたしの肩にもさくら

キッチン

深影コトハ

茉莉花と珊瑚礁

水也

真っ白いエプロンで立つキッチンでこれも自傷と呼ぶのでしょうか

鍋の火をぼうっと見つめているときの不意にひらめく前世占い

熟れすぎたキウイの多分プライベートゾーンのあたりを潰してしまう

包丁と腕が一つの生き物になって離れぬ白昼夢だった

ブレンダーって便利ですねドロドロにしてしまえるのねどんなものでも

月面もエプロンも日々正面をあなたに向けて美しい顔

カタカナが多い料理のカタカナでなかった箇所をスプーンで潰す

妻という額縁のなかにスパイスを綺麗に並べて満月の夜

ジャスミンと呼ばばよいのよ同じにはなれないものよまりかまつりか

華やいでいるわと塗った爪の先わたしの色ではないのだけれど

屍をつみあげている最中に踊るのひとりかがやいている

あとかたもなく消えていくはずだった月のひかりに芳香がゆれ

白花をかさねてまるととのえる記憶の隅に打ち捨てていく

だれだって振り返るものうるわしく光るしずくのなないものみたい

終わりのなき身を欲すれば焦熱よ在れもせずには花を望みて

ちぎりとるように生きてた上澄みのうつくしさしかわたし知らない

みんなのプリキュア

深山睦美

プリキュアになってわかったことがあるプリキュアだから言えないけども
プリキュアは違憲だという人たちを論破するため貼られる画像
新しい制度がいかに安全か元プリキュアが説明します！
国連で平和を説いたプリキュアはみな虹色の服を着ていた
プリキュアよ好きな韓流アイドルを訊かれ素直に答えるなかれ
平和維持活動中のプリキュアが見下ろしているふるさとの海
あれほどの活躍だったプリキュアを祀らないのは失礼だろう
プリキュアになりたいというお友達、今の気持ちを忘れないでね

倉式珈琲店

三好くに子

やうやくに見つけし本をレジに置く レシートは奥付けに挟み込む
啓文堂書店の隅に昏むカフェ わが指定席を待つ三十分
世阿弥いふ〈花〉の正体つきとめむ『風姿花伝』のポップな頁
お待たせをいたしましたと店長の蝶ネクタイと銀色の盆
サイフォンの珈琲の香をくぐりくる老いは購ひきた本を手に持ち
真四角の水から泳がせてほんのり酸味のあるカフェ・オ・レ
眼つむれば、声、咳、足音、ジャズピアノ、珈琲の香り、新刊の匂ひ
いにしへは風に名前がついてゐたウェイトレスが運ぶ風にも

玉葱のやうなオレンヂのやうな

村田一広

さながらアクアリウムねコンビニに光るミネラルウォーターのむれ
雨垂れがぼつりぼつりと穿ちゆく石が雨蛙に姿変ふ
赤身にサラダ油を混ぜればトロの味になるでせう？ 海苔巻きを切る
タカアシガニが歩く音して突風に纏れる高窓のブラインド
直前まで清見オレンヂかと思ひ手に執れば皮のついた玉葱
ベビースターラーメンの細めん嘴で器用につまみ食べてる鴉
猫だけが僕を見抜いて空つぽを潰さぬやうに膝に座つた
ぬひぐるみの瞳のことば翻訳す（あなたに買はれたい。レヂヘゴ）

晩夏の一日

森内詩紋

どこまでも行ける気分で歩きだすゼブラゾーンは白だけを踏む
新しいビルが建つのか此所だけは活気にみちて駅のクレーン
大判のガラス戸据えたウマ台を運ぶトラック街道を行く
「こんにちは買い物ですか？」ええ、今日はモンキーレンヂを入手したくて
「センセー！」って駆け寄ってきた五年生 ギブーギブーそれじゃベアハグだ……ぐっ！
帰り道気になっていた店に寄る「マスタード抜きでホットドッグを」
十字路に見慣れぬマシン新型のネズミ捕りだと笑う警官
くたびれて家に着いたが玄関にセミ・ファイナルとう晩夏の畏が（汗

心の果て

虫武一俊

遠くから君を憎んでいた真夏 地学準備室に水晶昏し
これは人工の熱風 路地裏になるほど室外機の群生は
降りそうな天気になると黙りだしそしてまた腹ふるわせる蟬
理科室を燃やせばこの目に火は入り揺らめくような追憶がある
ここを心の果てだと思ふしんかんと夜風に無機の光連なる
長大な駐車場並び遠くから来て遠くへと帰る郷愁
捨ててしまったものを直視するまでにこの先をたぶん一〇年くらい
置き去りは周回遅れ また同じ景色のなかに入ってしまう

夏の終わり

六浦筆の助

団結を支えたキャンプの残り火をいたわるように包む朝焼け
夏期講習残務仕上げるかたわらで玉置浩二が歌う「ハーモニー」
思い切りスパークしたの？ 江ノ島の花火の破片砂に埋もれて
親友の墓参の帰路に黙りこむ我等にしんみり過ぐ風の盆
バイクだけかする真昼の商店街「楽しいお買い物♪」だけ宙に
累々と残暑の倉庫の屍となりゆく暑中葉書のかもめ
マラソンのゴールの「サライ」が消えてから夏の風船しぼんで消えて
横浜でキミが食べてるももパフェはゆっくり夏の終わりを見えた

月がいる月がない

杜野詩季

おやつ前二人で見とれる朝顔の花は薄桃透けなくらいの
水栓を開ければホースと息合わせ夏のダンスを子はやめられない
まだ海を知らない子らにいつの日か言わねばならぬ震災のこと
うつすらと覚え始めた形だろう「はこ」と指差すビルのそれぞれ
夏の陽はしずくとなって真昼間にアリを追う子の額に落ちる
月がいる月がないとわかるんだ つき、きょう、あそこ 白いかげら指す
お祭りが子に優しくてかき氷、ヨーヨー、金魚と手は忙しい
少しでも冷たい場所を探し出しシーツを泳ぐ熱帯夜の子

lush

臙

感情を切り分けるのは苦手なのフリーズドライストロベリーも
練乳のチューブ直接吸ふやうなあなたをいつも見てゐたいから
真面目とか誠実だとか言ひ訳の河童の皿のカラメル味の
嫌ひにも好きにもなれずマシユマロをいくつも焦がす血が燃えてゐる
チョコレートまみれにしたいビターでも左の頬にくちづけをして
理想つてチューイングガムのなかにあるさはれないからよこれないまま
マカロンを守らうとする目に映るロッキンホースバレリーナ・蛇
パイ生地レモンカードを塗つてゆく最初に会った唾液のゆくへ